

## 学位請求論文（課程博士） 審査報告書

氏名・（本籍地）：河田 純一

学位の種類：博士（人間学）

学位記の番号：甲138号

学位授与の日付：令和5年3月15日

学位論文題目：がん経験者の自己アイデンティティに関する経験的研究  
——再帰的自己論の視座から

論文審査委員：主査 井出 裕久

副査 荒川 康

副査 張江 洋直

副査 浅野 智彦

### 論文の内容の要旨（1200字以上）

本論文は、「医療の進歩、がんを取り巻く社会の諸制度やがんに対する人々の考え方が大きく変化する現代社会において、がん経験者たちが、どのような人生を歩むのか、その時々でいかに自己アイデンティティを再構成しているのかをギデンズの再帰的自己論（Giddens 1991=2005, 1992=1995）を活用して明らかにすること」を目的としている。

本文は、序章と第1章から第6章および終章からなる。各章の概要は以下のとおりである。

序章「本研究の目的と概要」では、まず本論文の現状認識が述べられる。生存率が改善し入院治療から通院治療へシフトするなど、がんが慢性疾患化していること、こうしたがんのあり方の変化にともなって「がんサバイバー」「がんサバイバーシップ」の考え方が普及してきていること、さらには関連する先行研究について言及される。それらを踏まえて、本研究の目的が改めて示される。

つぎに、この目的のために行なわれた調査の概要が記される。第2章から第4章と第6章で主要な資料とされるのはインタビューのトランスクリプトである。インタビューの調査協力者は、若手がんサバイバー交流会内で募られた。この交流会は、「自称若手」のがん患者・経験者の集まりであり、都内の喫茶店を会場に年に3～5回開かれてきた。参加者は20代から40代が中心で、通う病院やがんの種類は問われず、食事のほかアルコールも提供される。自らもがん患者として従来から参加していた筆者は、本研究を開始した2018年以降は調査の一環であることを主催者・参加者に伝えたいうで出席していた。

第1章「再帰的自己論とがん経験者の自己アイデンティティ」ではまず、本論文の理論的視座となるA.ギデンズの再帰的自己論の要点として以下の2点が確認される。1つは、社会構造との関係において、その社会構造をも変容させつつ、個々人が自分は何者であるかを自己自覚的・再帰的に再構成していくとされることである。もう1つは、自己アイデンティティが、特定の物語を進行させる能力のなかにあり、個人誌（biography）という観点から自分自身によって再帰的に理解されたものとされる点にある。この点において、自己アイデンティティの再構築が、過去を解釈することのみならず将来に向けて準備すること（ライフプランニング）にかかっているとされることが強調される。

後半では、がん経験者の就労支援をテーマとした書籍に掲載された2人の事例が紹介された。がん患者が働きつづけるためには、同僚や取引先に自身の状態をどのように伝え説明するか（あるいは伝えない）など、職場でさまざまな工夫が必要となる。そのため就労は、自らの病いに自覚的になり、再帰的に個別具体的な「がん患者」となっていく重要なプロセスの1つであることが論じられる。

第2章「語り直される病いの経験——慢性骨髄性白血病を経験したEさんの「転機」の語り」では、Eさん（40代男性）の事例を取りあげ、がんによって自己物語が語り直されるとはどのような経験なのかが彼の語りをもとに検討された。彼はインタビューで、慢性骨髄性白血病（CML）の罹患が、それまでの「暗黒時代」を終わらせる人生の「転機」になったと語った。

Eさんは現在、若手がんサバイバー交流会の主催者の1人であり、複数のNPO法人の活動に積極的に関わっている。彼は、CML罹患以前に骨巨細胞腫を発症し、その手術の後遺症として29歳で排泄障害を負った。外出先での排泄の失敗やトラブルを避けるために「仕事しかしていない。〔勤務のない〕土日〔は〕家でこもる生活」をし、友人をつくることもなかった。しかし、当時の彼がそのような生活を「暗黒時代」と捉えていたのではない。それは、CMLの罹患という「転機」を経て、それ以前の生活を振り返ることで初めて再帰的に立ち現れたのである。そして、「暗黒時代」の終わりは、①副作用のマネジメントによる日常生活の変化と、②セルフヘルプ・グループへの参加による他者との交流によってもたらされたと論じられる。

第3章「がん経験に伴うライフプランニングの再構成——がん経験者の就労経験を通じて」では、がんを理由に働く／働き続けることができなかつたIさん（30代女性）とBさん（30代女性）の語りを取りあげ、ライフプランの再構成という視座から、彼女たちがその後どのようにアイデンティティを再構成していったのかが検討される。

この2人に関する検討から指摘されるのは、つぎの2点である。

大学4年時に卵巣がんに罹患したIさんは、内定していた都内の企業から内定を取り消された。Iさんは、当時「今〔の自分〕を表すものがない」「何者でもない自分」であることに苦悩していたと語る。正規職員として福祉施設で働いていたBさんは、卵巣がん・子宮体がんに罹患し、手術、治療終了までの8か月間休職した。治療中の彼女は、職場復帰を希望していた。それにもかかわらず、結局それは果たせなかった。仕事を失ったBさんは、働いている友人から「取り残された」ことに焦燥感を抱いていた。就労に関する人びとの「知識」は、現代社会においてライフプランニングの「地平」を形成している。2人の語りからは、がんによって自明視していたライフプランの実現が閉ざされたとき、就労という地平が苦悩を伴って主題として浮上してきたことが読み取れる。

2つめの点は、ライフプランニングのあり方についてである。ギデンズは、ライフプランニングとは「自己の個人誌に登場する将来の活動のコースを準備するための手段」(Giddens 1991=2005: 94)だとする。Iさんのライフプランは、この定義のように自分の未来についてある程度周到に計画しているようにみえる。これに対して、Bさんは、これまでの経験から「なんとかなるだろう」、そしてこれからも「平々凡々な人生」を送れるだろうと、自らの「人生設計」を反省的に語る。ライフプランニングは、緩やかな展望としても構成され得るのである。

第4章「職業としてのがん患者——「がん経験」を活かすHさんの経験」で取りあげられるのは、自らのがん経験を活かして企業での研修や講演活動、執筆活動などで生計を立てているHさん(50代男性)である。本章では、「3つの疾患履歴」のある彼が、どのように自らの「患者」経験を職業人生に反映させ、意味づけてきたのかが、その語りをもとに記述される。また、「患者」であることを職業に反映させるHさんの生き方は、社会の諸制度との再帰的循環のなかで達成されていたことが指摘される。2007年に施行された「がん対策基本法」を、彼は「大きなきっかけ」と語った。がん対策基本法をはじめ、がんに関する政策決定や医療、医学に関する制度それ自体が、常にごん患者の声を取り入れる制度的(外的)再帰性を加速させている。こうした諸制度は、その性質上、Hさんのように自らの経験を政策や医学の言葉で提言可能ながん患者・経験者を必要としている。さらに、企業も経営的な助言や、企業価値を高める戦略に資するがん患者・経験者を求めているのである。

第5章「新たな医療カテゴリーの成立によるメンバーシップの再構成——若年がん患者からAYA世代へ」では、前半でまず、「AYA世代」という新たなカテゴリーが、がん医療とがん政策においてどのように成立したかが確認される。後半では、若年性がん患者会の会報誌において、いつ、どのように「AYA世代」が用いられるようになったのかが分析される。この前半後半のいずれにおいても、ギデンズのいう「制度的再帰性」がそれぞれの位相で働いていることが指摘された。

第6章「共同体の物語と自己物語——Eさんの参加した2つのセルフヘルプ・グループを事例に」では、第2章で登場したEさんが再び取りあげられる。本章では、彼が参加した2つのセルフヘルプ・グループそれぞれの「共同体の物語」と、彼の自己物語の再構成過程との関係に注目し、以下のように論じられた。セルフヘルプ・グループの前提となる経験の同一性は、どのように自己をカテゴライズするかによって伸縮可能なものである。そのため複数のグループに参加することで、再帰的にがん患者・経験者としての自己アイデンティティを再定義し直し、幾重もの自己語りを可能にさせ得るのである。

終章「結論」では、本論文で明らかにされたことが、その3つのねらいとの関連のもとにまとめられる。第1のねらいは、個別具体的な事象の記述を通して、つぎの2つの課題に答えることであった。1つめの課題は、がん経験者のアイデンティティの再構成過程を、がん経験の慢性疾患化が要請する長期的な視点から記述し、再帰的自己論を用いて分析することであった。この課題には、おもに第1章から第3章で取り組まれた。2つめの課題は、再帰的自己論の視座から、がんのもつ社会的な意味や社会の諸構造とがん経験者自身の自己像との関連を提示することであった。これには、おもに第4章から第6章で応えたとされる。

第2のねらいは、調査協力者の経験の記述を通じて、ギデンズの再帰的自己論を、具体的な現象を説明する水準で活用する道筋を示すことであった。これは、第2章から第6章によって達成されたとされる。そのうえで、本研究を通して浮かび上がったギデンズの再帰的自己論をめぐる2つの論点が強調される。

1つめは、ギデンズの論じる再帰性における内的な「自己再帰性」と外的な「制度的再帰性」の区別と、両者の大きななかかわりについてである。ギデンズがこの2つの再帰性を厳密に区別していない点については、すでに中西眞知子が指摘している(中西 2003: 105)。2つめは、自己の再帰性における「情動的欲求」の働きである。ギデンズの再帰的自己論には、ほかの自己の社会学にはないこの情動的なあり方への言及があると、A.エリオットが指摘している(Elliott 2001[2007]=2008: 77)。本論文においても、これらギデンズの再帰性論もつ諸特長は、各事例を通じて観察、確認された。

第3のねらいである、がんサバイバーシップ研究への貢献については、筆者自身の経験を振り返りながら、研究の有する再帰性を通じて、本研究がサバイバーシップ研究に貢献し得ることを願っているとされる。

## 審査結果の要旨（1200字以上）

河田純一氏の学位請求論文について、予備審査を経た修正論文に対する口述試問の実施後に審査委員の合議による審査を行なった。その結果、本論文が本学「学位論文審査内規」第3条の本専攻に関する審査基準を含め、第4条で規定された基準を充足し、学位請求論文として十全な意義を有すると認め、委員4人が一致して「合格」と判定した。

本論文は、「がん」が「慢性疾患化」する現況において「がん経験者」の自己アイデンティティがどのように再構成されるのかを、英国の社会学者A.ギデンズが提唱する「再帰的近代化論」、ことに「再帰的自己論」に立脚して、セルフヘルプ・グループへの参与観察を踏まえたインタビュー調査を中心とする経験的研究によって明らかにしようとするものである。この問題設定は明確であり、それを解明するための理論との切り結び方は巧みである。

実施されたインタビュー調査の対象者は9人、論文内で直接分析対象として取りあげた者は4人と、人数は決して多くない。しかし、筆者自らががん経験およびそれまでの調査対象者との関係をもとに行なったインタビューのトランスクリプトにもとづいて、対象者の感情にまで分け入って、がん経験者たちの自己アイデンティティの変容と再構成を記述することに成功している。本論文のタイトル「がん経験者の自己アイデンティティに関する経験的研究」には2つの「経験」が列記されている。この2つの「経験」の意味内容は異なっているのだが、同時に、それらが見事に呼応し合っている点は、本論文の特質を端的に示しているといえるだろう。本論文の記述によって読者は、なぜセルフヘルプ・グループが必要なのか、なぜ再帰的に自己アイデンティティが構成される際に他者が必要とされるのかを、実感できるにちがいない。

また、アイデンティティ（の再帰性）と制度（の再帰性）とが、それ自体再帰的に相互を形成しあっている過程を、「AYA世代」という具体的なカテゴリーに即して明らかにしたことは、重要な学術的貢献である。さらに、ライフプランニングが緩やかな展望としても構成され得ることの指摘や（第3章）、本研究を通して浮かび上がったギデンズの再帰的自己論をめぐる2つの論点の提示など（終章）、調査研究をとおして社会学理論と対話しようとする研究姿勢も高く評価すべきものである。

このように本論文はすぐれた特質を具えているが、別の観点からも評価が可能である。

その1つは、ギデンズの再帰性の議論自体の扱い方についてである。ギデンズによれば、近代において諸制度はすでに常に再帰的構造を顕現化させ、その再帰性の発動が社会構造の変容を結果させ、その変容がそこに生きる個々人の自己アイデンティティを自己自覚的・再帰的に構成するとされる。この図式を経験的事実に当てはめる形で記述してしまうと、「ある制度に変化があった」以上の意味内容をもたせることが難しくなり、実際にその制度を動かしている広義の権力関係に対して分析や記述が十分に及ばなくなってしまうという危険性を指摘できる。

また、本論文をやや俯瞰してみれば、「ライフプランニング」「アイデンティティ」が現代社会においていかに達成されているのかが、がんサバイバーの語りをとおして把握できるというのがその主題であった。だとすると、それと同時に、それらを達成せよという圧力からいかに逃れていくかという論理や工夫もまた、サバイバーたちの語りからみえてくるのではないか。「職業としてのがん患者」は、そのような試みの一端だとみなしうるはずである。

しかしながら、これらの指摘は、本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ今後の河田氏の研究の多様な展開の可能性を示すものとして評価すべきである。

以上のことから、審査委員一同は、本論文が博士（人間学）を授与するにふさわしい水準にあるものと判断した。